

忘れえぬ人々

——女性旅行家B・M・エリアーシヨヴァーの初来日の背景——

ブルナ・ルカーシユ

一、はじめに

一九一二（明治四五）年、のちに母国のチェコで女性旅行家、著作家、日本文化の紹介者として知られるようになるバルボラ・マルケータ・エリアーシヨヴァー（Barbora Markéta Elišová, 一八七四—一九五七）は、彼女の人生を変える一大決心をした。それまで八年間ほど教鞭を執ってきたプラハの高等商工業女学校で、一年の無給休暇を取得し、八月九日、プラハ中央駅で午後五時二三分発の国際列車に乗り、憧れの日本へ出発した。三六歳の時であった。

一九〇四年に朋友と二人で数週間をかけてドイツ、イギリス、フランスとスイスを漫遊し、一九一〇年と一九一一年の夏休みに職場の仲間と隣国スロバキア^①を旅した以外

は、旅行経験が皆無に等しかったエリアーシヨヴァーにとって、これが初めて単身で行う遠遊であり、慣れ親しんだ西洋文化圏から未知の世界へ踏み出していく冒険でもあった。良妻賢母にふさわしい敬虔柔軟な態度を求める声が強く、女性の自立自営や単独行動が冷ややかな目で見られる嫌いが未だあったこの時代に、エリアーシヨヴァーは女性一人で日本に向かった。他の旅行家たちと異なり十分な旅行資金を持ち合わせていなかったこと、日本に知人と呼べる人がひとりもなく、当時日本語が全く出来なかったことなどを考えると、無謀な計画と言われても不思議ではない。じつさい、事情を詳しく知る友人たちは彼女の安全を懸念し、日本旅行を断念させようとした。^②エリアーシヨヴァー自身はといえば、不安を一切感じないほど無鉄砲な

性格の持ち主ではなく、疑問も躊躇いもあつたが、やがて、不安を感じつつ好運を信じて母国を旅立つことにした。並々ならぬ勇氣、忍耐と行動力がなければ取行できないような計画ではないのはもちろんだが、この決意の背景には、もうひとつの重要な要素として、彼女を支援した複数の人物の存在があつた。プラハのカレル・フェルディナンド大学（現・カレル大学）の教授であり、ドイツ語を専門とした言語学者および文学研究者であるヴァーツラフ・エマヌエル・モウレク（Václav Emanuel Mourek、一八四六—一九二一）、エリアーシヨヴァーにとって最初の勤務校となつたプラハの高等商工業女学校の校長ヨハンナ・クフネロヴァー（Johanna Kufnerová、一八五三—一九二一）、それから、一九二二年、来日直後の戸惑いを乗り越えるのに手を貸した、東京帝国大学英文科教師ジョン・ローレンス（John Lawrence、一九五〇—一九一六）の妻、ミセス・ローレンスのことである。本稿は、エリアーシヨヴァーと、これらの恩人たちの関係に光を当てる。

二、異文化の魅力を教えてくれた〈父〉

一九世紀後半と二〇世紀初めに世界を旅した女性には、不自由のない裕福な家庭に生まれ育つた人や結婚して資産

と地位を手にした人物が多いが、エリアーシヨヴァーは、貧しい家庭に生まれ、年若くして父と母を亡くしている。その後、親戚の家に引き取られたが、召し使い同然の扱いを受け、ありとあらゆる辛酸を嘗めた。愛情に飢えた寂しい日々がつづくなか、読書と勉学の時間がせめてもの慰めとなつた。明るい未来を望めない孤児だつた彼女は、教養のみが自分を貧困の地獄から救いあげてくれることに逸早く気づいていたのだろう。一六歳の頃に村を飛び出し、モラヴィア地方の最大都市であるブルノで、昼は女工として生活費を稼ぎ、夜は夜間学校に通い語学の勉強に取り組んだ。一九〇〇年前後の彼女の生活についてはほとんど知られていないが、一時期オーストリア人の家庭に住み込みの女中として奉公し、ウイーンで生活したこともある。

二〇世紀の初め（正確な年月は未詳）にウイーンからプラハに移住したエリアーシヨヴァーは、寄木張りの木材製造会社社に事務員として勤務しながら語学の勉強をつづけた。一九〇四年にカレル・フェルディナンド大学で、念願の教員職を得るために必要なドイツ語の国家試験を受験したが、その際、エリアーシヨヴァーの作文が、試験の総合監督をつとめた同大学教授V・E・モウレクの目に留まつた。これがきっかけとなり、二九歳の女性教員志望者と、二年後に還暦を控える教授が厚誼を結んだ。モウレクはエ

V・E・モウレクの肖像（『チェコの世界
（Český svět）』一九一一年一月三日）

モウレク訳『アジアとヨーロッパを
巡るヴェガ号の航海』の中扉

リアーシヨヴァーにとつて理解のある指導者となり、心温かい支援者となった。彼は人生の岐路に立ち思い悩んでいた彼女に進むべき道を示した人物でもあり、後年、彼女は病没したモウレクを知らずに亡くした父の代わりとなる人として追慕した。⁽³⁾

モウレクは一八四六年にブシエシュティツエ市近辺のルフ村（現・プルゼニ州、ティーニシユテ村）に生まれた。クラトヴィ高等学校卒業後、カレル大学に進学し、古典言語学、すなわち古代ギリシャ語とラテン語、そしてドイツ語を専攻した。一八七一年に国家試験に合格し学位を得たのち、南ボヘミアのブジエヨヴィツエ市（現・チェスケー・ブジェヨヴィツエ）の高等学校で講師となった。一八八三年には博士号を取得し、プラハ高等学校で教鞭を執った。一八八四年、教職志望者が受験するドイツ語の国家試験の総合監督に任命されたが、この役職のおかげで、彼はその二〇年後、エリアーシヨヴァーと出会うこととなる。一八八八年にカレル・フェルディナンド大学の特任教授、一八九四年に正規の教授となった。

モウレクはドイツ語とドイツ文学を専門とした——着任後、モウレクの提案により文学部にドイツ・ゼミナールが新設され、彼が初代所長に任命された——が、研究対象は決してこの領域に限定されず、英語圏文学や母国の同時代

文学についても造詣が深く、数多くの成果を残している。

モウレクは日々教壇に立つ教育実践者であったのみならず、教育方法論を意欲的に考究した学者でもあった。一八七五に考案した高等教育機関用のドイツ語教育のカリキュラムは全国の高等学校に採択され、以後長年実施されるようになり、一八八二年に上梓したドイツ語教科書『中学校高等科用チェコ語・ドイツ語翻訳練習問題集』*Cvičebná kniha ku překládní z jazyka českého na jazyk německý pro vyšší třídy středních škol* (Budějovice: V. E. Mourek, R. Benninger, 1882) は文部科学省により検定教科書に認定された。同年『チェコ語・英語辞典』*Slovník jazyka českého i anglického* (Praha: I. L. Kober, 1882) を出版し、またプラハ移住前に『独学者用の英語教科書』*Učebné listy jazyka anglického pro samouky* (Praha: Fr. A. Urbánek, 1886-1889) を上梓している。上京してから語学教材の作成に携わることは少なくなつたが、学校教育の現場への関心を失つたわけではない。一八八七年からチェコの学校で実施されるドイツ語のカリキュラム、ドイツの学校で実施されるチェコ語のカリキュラムの編成にかかわり、中等学校のドイツ語教育に関する論文も発表している。

大学教授着任後、『リベル・デピクトゥス (Liber depictus)』⁽¹⁾をはじめ中世期のチェコとドイツの写本の語彙や文法

ゴート語の前置詞の機能や複文構成をめぐり、文法論および文学史的論考を複数発表し、ドイツ文学者としての名声を確率した。しかし、前述のように、ドイツ語とドイツ文学の研究だけにとどまらず、スコット、シェイクスピア、デイフォーやロングフェローの文学を扱った評論も執筆していたモウレクは、時に本来の専門より英語圏文学に強い関心を傾けていたように思われるほどである。チェコの古今の文学、とりわけ詩に関する発言も多い。

研究活動の内容からもわかるように、モウレクは異文化に強く惹かれたが、外国旅行のチャンスに恵まれない人たちに、間接的ながらも異文化を紹介してくれる旅行文学に関心を持っていたことも見落としてはならない。モウレク自身は、ヨーロッパ以外の大団に足を踏み入れることはなかったが、旅行は好きで、一八八七年に行ったイギリス旅行の印象を書き記した『今日のイギリスより 旅行の印象』*Z dnešní Anglie: dojmy z cesty* (V. E. Mourek, 1888) を刊行している。だが、モウレク自身の旅行記より興味深いのは、むしろ彼が手掛けた外国旅行記の翻訳である。

明治日本でも人気を集めたスマイルスの『向上心』*Karakter* (Praha: J. Doležal, 1876) のチェコ語訳で翻訳家としての活動を開始したモウレクは、北東航路の開拓者として名高い生物学者 A・E・ノルデンシヨルド (Adolf Erik

日本滞在中のエリアーショヴァーとモウルコヴァー夫人は盛んに文通を行った。日本郵便局の消印に一九一三年二月二八日の日付が記載されているこのハガキは、赤坂水川町のローレンス宅に送付され、エリアーショヴァーが宿泊していた今城館に転送された。送られてきた日本の写真に対してのお礼と、近日ローレンス夫人に手紙を書くことが伝えられている。(ナールステク博物館所蔵、E1. 1/16 111)

Nordenskiöld, 一八三二—一九〇一)による旅行記『アジアとヨーロッパを巡るヴェガ号の航海』*Planba Vegy kolem Asie a Evropy* (Praha: Franůšek a Šimáček, 1882-1883) やイギリスの女性旅行家A・ブラッシー (Anna Brassey, 一八三九—一八八七) による旅行記『世界一周「サンビーム号」での旅行』*Kolem světa: výlet po lodí Sinbennu* (Praha: Libuše, Matice zřabavy a vědění, 1883) のチェコ語訳を一九一〇年代前半に続けて刊行している。ここで注目すべきは、ノルデンシヨルドとブラッシーがともに日本を訪れ、それぞれの旅行記において、日本滞在中の出来事や日本文化の印象を色鮮やかに記述していることである。モウレク教授と親交を結んでからしばしばその宅を訪れ、本を借りることもあったエリアーショヴァーが、恩師の著書を読まなかったはずはなく、日本を訪れる前から異文化に強い関心を持っていた彼女は、その旅行記に触れていた可能性は高い。エリアーショヴァーと交流のあった作家網野菊は、短編小説「九官鳥」(『中央公論』一九二六・九)の中で「其時でした、私が私の最初の日本への旅を思い立つたのは。私は或本の中で日本のことを読んでみました。私は自分の悲しみを慰めるために、遠い、サクラの国を訪ねてみようと考えました」と、エリアーショヴァーをモデルにしたミセス・モリアンという中心人物に語らせている。エリアー

シヨヴァアの生涯にわたる日本への憧れに最初に火をつけたのは、恩師モウレクが翻訳したノルデンシヨルドカブラッシーの旅行記だったのではないだろうか。

モウレクとの交流を考える際には、その妻ジェーン・モウルコヴァア (Jane Moukova, 旧姓 London, 一八四六一一九一四) のことも忘れてはならない。モウルコヴァア夫人は、北アイルランドでスコットランド人の家庭に生まれ、北アイルランドでスコットランド人の家庭に生まれ、二人はモウレクがイギリスを訪問した際に知り合っている、結婚に至ったのではないかと考えられる。モウレクとその夫人が、A・V・シユミロフスキーの小説『天国』(Heavens) (London: Bliss, Sands & Foster, 1894) の共訳——これが近代チェコ文学の最初の英訳の一つだろう——を刊行していることから、彼女は、チェコ文学にも関心を持っていた、教養ある女性であったと窺い知れる。

一九〇四年、エリアーシヨヴァアは偶然にもモウレク教授と知己を得て、その家に入居するようになった。モウレクは、勉学意欲の強いエリアーシヨヴァアを指導し、またさまざまなかたちでサポートもした。モウレクと知り合って間もなくエリアーシヨヴァアは西欧旅行を企てたが、その際、資金不足を補ってくれたのは、モウレク夫妻であった。

モウレク夫妻との交流は長年にわたり続いたが、

一九一一年、モウレクが脳溢血のため急逝した。エリアーシヨヴァアにとつて、恩師の死は青天の霹靂であり、日本旅行の決意を促す刺激の一つとなった。日本には誰ひとり知人がいなかったが、彼女はモウルコヴァア夫人による、当時東京帝国大学で英文学を教えていたジョン・ローレンス教師への紹介状を手に旅立つことにした。この伝手がなければ、エリアーシヨヴァアの初来日はおそらく実現されることがなかっただろうし、結果的に、彼女は世界を旅した旅行家にもなれなかったかもしれない。モウレク夫妻の心温かい援助こそが、女性旅行家エリアーシヨヴァアを生み出したのである。

三、女性の手本を見せてくれた〈母〉

一九〇四年の春に、カレル大学で英語の国家試験に合格したエリアーシヨヴァアは、同じ年の秋から、近代チェコの女性解放運動の一翼を担ったチェコ女性生産協会 (Ženský výrobní spolek český) の付属校、高等商工業女学校 (Obchodní a průmyslová škola) で英語の講師として教鞭を執るようになった。長年にわたる苦学の結果、彼女は、安定した収入と社会的地位とともに、夢見た自立自営の生活を手に入れることに成功した。二年後、エリアーシヨ

ヴァーはドイツ語の国家試験にも合格し、ドイツ語教員の資格を得た。

一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけてチェコの女性解放運動において主導的な役割を果たしたチェコ女性生産協会は、小説家K・スヴェトラー (Karolína Světlá, 一八三〇—一八九九) やE・クラスノホルスカー (Eliška Krasohorská, 一八四七—一九二六) らにより、生活に困窮した女性、とともにシンプル・マザーの救済、女性による生産支援や自立自営につながる女性教育の推進を標榜して一八七一年に設立されたが、エリアーショヴァーが英語講師として着任した高等商工業女学校も同年に開校した。協会は、女性救済の一環として、女性が貯金し、低利子で借入れできる貯蓄銀行を設立し、求職の女性たちのために職業紹介所を設置した。高等商工業女学校は開校当初、プラハのスパールナー通りの聖トリニティ教会の横並びの建物のなかにあったが、一八九六年に、レスロヴァ通りに新築されたネオルネサンス式のビルに移転された。初めて受験生を募集した一八七一年には、一五〇人ほどの女学生が入学し、その後も安定した経営をつづけ、評判の女学校となった。

エリアーショヴァーは一九〇四年に英語の講師として採用されたが、この職を彼女に紹介し、推薦人ともなったのは、他でもないモウレク教授であった。一九〇四年一月

に協会の機関誌『女性雑誌 (Ženské listy)』に掲載された年間報告書では、女学校のカリキュラムに英語が導入されたこと、新科目の担当教員としてエリアーショヴァーが採用されたことが記されている。新設されたばかりの英語科目の担当者に教育経験のない新人教員が採用されたことのうちには、エリアーショヴァーの英語の実力への信頼を読み取ることができる。

一九〇四年から一九二〇年まで、一年ほどの日本滞在をへさみ、およそ一五年におよぶ女学校教員時代について、エリアーショヴァーは「一生でもっとも幸せな時期であったろう。若い人たちに囲まれて、わたし自身も幸せな幼年と青年時代のかげらを味わった」と、晩年の「運命に翻弄された」*Na which osudu* (未発表) で回顧している。彼女はその後、市立工業女学校とプラハ高等女学校でも講師を務めたが、教育者としての洗礼を受けたのは高等商工業女学校であり、ここで過ごした時間、ことに来日前のおよそ七年間は、彼女の記憶に深く刻まれた。旅行家、また作家としてのエリアーショヴァーは、ここで、この時期に誕生したといっても過言ではない。

女学校の講師に着任したエリアーショヴァーは、積極的に教育に取り組み、理解のある若手教員として学生に慕われるようになった。教職を離れてから多くの時が流れても、

エリアーシヨヴァーは昔の教え子たちから手紙やハガキを受け取っており、そのことは彼女の教員としての人気を如実に物語る。英語教材の作成も手がけ、一九〇七年に『学校用英語練習帳』*Čtebnice anglického jazyka pro školy* (Praha: Bursík a Kohout, 1907) を出版した。語学教材を多数作成しているモウレクから有力なアドバイスがあったのだろうが、エリアーシヨヴァーの教科書は翌年に文部科学省の認定を得て、初の英語の認定教科書として他学校でも使われるようになった。着任からわずか三年で、彼女は英語教員および教材の作成者としてその実力を認められたわけである。想像もつかぬ成功に喜びを噛みしめたには違いないが、

J・クフネロヴァー (校長在任中のハガキ)

彼女はそれで満足したわけではない。

エリアーシヨヴァーは高等商工業女学校でもう一人の恩師と出会った。それが当校の校長をつとめたヨハンナ・クフネロヴァーであり、その薫陶のもとで彼女は教員として研鑽を積むこととなる。フランス語を教えたクフネロヴァーはエリアーシヨヴァーにとつて経験豊富な指導者であり、また心が通じ合う良き友でもあったが、そればかりではない。エリアーシヨヴァーは子供の頃から作家になることを夢見ていた、と「運命に翻弄されて」に記しているが、文筆家や翻訳家でもあるクフネロヴァーの影響下で、作家になろうという夢の実現に向けて初めて本格的に動き出したと思われる。高等商工業女学校に着任してその翌年の一九〇五年から、エリアーシヨヴァーの短篇小説や随筆が『女性雑誌』に掲載されるようになったのは決して偶然ではない。

クフネロヴァーは一八五三年、南チェコに生まれた教育学者、文筆家ならびに翻訳家であり、近代チェコの女性解放運動の重要な活動家の一人でもあった。高等女学校でフランス語を学び、フランス文学に関心を持った彼女はその後、チェコ女性生産協会の高商工業女学校に入学し、勉強をつづけた。スヴェトラーらの交流を持つてから、教育者として女性の社会進出を支えることを決意し、カレル・

フエルディナンド大学で教員資格の国家試験を受けた。試験合格後は、ドイツとフランスに短期留学し、さらに語学を深めた。帰国後、フランス語の教員となり、一八八五年に三二歳で高等商工業女学校の校長に選ばれ、一九一一年に五八歳で没するまでこの任務を遂行した。「先生に対してなら質問しなくてもいい、初めて会った人でもすぐにそれに気づく。というのも、彼女の鋭い眼は、人の質問をさきに読み取るからだ。その目は心の奥底を見透かしていた。解けない秘密や難問なんて彼女にはなかった」と、クフネロヴァー没後に女性活動家のJ・フライシユハンソヴァーがその人がらについて述べた。

クフネロヴァーは、エリアーシヨヴァーにとって上司であつたわけだが、二人の関係は決して人情味のない労使関係にとどまるものではなかった。

学校、学校。わたしの昔の夢が現実になつた。朝目が覚めたとき、学校に行けると思うだけで心が踊る。往來は人の行き来が激しく、ひとりひとり職場に急いでいる。この混雑と忙しさをみるといつも思う。みんなはわたしと同じくらい幸せだろうか。みんなもわたしが学校に行くときの嬉しさを感じながら日々の勤めをこなしているだろうか。学校のすべては、わたしにとつ

てどんなに素敵で、どんなに親しいものだろう。学校のビルは新しく、教室は明るくて広い。わたしたちの校長先生は善意と親切そのものであり、とりわけわたしたち年若の教員にとっての母であり、心の友である。

(筆者訳、以下同様)

前掲の「運命に翻弄されて」の一節である。晩年に孤独感に苛まれるなか、およそ五〇年くらい前のことを回想しつつ執筆されたこの作品が、昔の教員生活が多分に美化していることは想像に難くないが、クフネロヴァーへの敬愛に偽りはないだろう。

そしてクフネロヴァーは、教育者としてのみならず、表現者としてもエリアーシヨヴァーに多大な影響を与えた。前述したように、クフネロヴァーは一八八五年に高等商工業女学校の校長に着任したが、翌一八八六年から文学活動を開始したと思われる。この年、五月から九月まで『祖国(Vlas)』に、チェコの古代に題材をとり、スラヴ民族が住んだ地域でのキリスト教の宣教を背景に、ひとりの女性の無私の精神とその犠牲を描いた中篇小説「オハルカ川の畔にて」を連載したが、これがおそらく彼女の第一作となる。教員としてばかりではなく、文学表現を通して若い女性に語りかけようとしたのだろう。その後、クフネロ

ヴァーは『祖国』でフランス文壇通信の欄を担当するなど、文筆家として盛んに活躍し、フランスの家庭小説の翻訳も手がけた。一九〇〇年にクフネロヴァーは高等商工業女学校の代表団を率いてパリの世界博覧会を訪れた。二週間ほどの短い旅行だったが、この時の観察と感想をまとめた印象記は同年の八月から『女性雜誌』に連載された。微に入り細を穿つ記述は読者の人気を博し、この連載は一九〇四年の一月までつづいた。

エリアーシヨヴァーは一九〇五年から『女性雜誌』に寄稿しはじめたが、これらの初期習作をみると、不運の女性の苦しい生活やさまざまな葛藤、女性の自己犠牲が繰り返り返し描き出されていることに気づく。例えば、「ハナの犠牲」*Haničina oběť*（『女性雜誌』一九〇五年七月八月）では、主人公ハナが、姉の病没後、その夫の家に住み、子育てを手伝っているが、最終的に自分の愛を諦め、姉の子供たちの母になることを決め、姉の夫と結婚する。一方、「麵麩を求めて」*Za chlebem*（『女性雜誌』一九一五年一月）は、一四歳の少女トニチュカが、夫を失い、子供たちの世話をしなければならぬ母を助けるため、ブルノの工場に通い、職工たちの卑猥な言動に思いやむが、母のために辛抱して仕事をつづける、という内容の小説である。エリアーシヨヴァー自身の悲惨な経験も多分に投影されているだろう。

が、女性の苦勞を描き、忍耐と献身を最大の美德とする考えが強く滲み出ている。このような女性観は後年に、日本の女性に対する彼女のまなざしに受け継がれたように思われるが、これらの初期習作に示されるエリアーシヨヴァーの思想にはクフネロヴァーからの影響が認められる。

エリアーシヨヴァーは一九一〇年に、「スヴェトラナ」という戯曲を執筆した。この戯曲はチェコ女性生産協会で上演され大盛況を博し、のちに『スヴェトラナ』*Světlana: pohádková hra o dvou obrazech* (Praha: Fr. A. Urbánek, 1911)として出版された。エリアーシヨヴァーにとってこれが創作として記念すべき第一出版となるが、「運命に翻弄されて」では、戯曲の執筆を薦めたのはクフネロヴァーであったとされている。作家として世に出るといってエリアーシヨヴァーの決意の背景には、クフネロヴァーによる感化があったことがここからもわかる。モウレクが旅行と異文化の世界への関心に火をつけた人物であったとすれば、クフネロヴァーは、エリアーシヨヴァーに女性教員と女性作家という二つの道を示してくれたと言えるだろう。

四、極東の友ミセス・ローレンス

モウレクとクフネロヴァーは、英語教員の職を得て新し

ローレンス一家
（『英語青年』一九一六年五月）

J・ローレンス（『英語青年』一九六〇年一月）

い道を歩みはじめたエリアーシヨヴァーに多大な刺激を及ぼした。二人の教育者による薰陶のもとで、彼女は異文化への好奇心と執筆の意欲を掻きたてられ、旅行家と、それから作家という自分の将来像を強く意識するようになった。一九一一年の日記では、エリアーシヨヴァーはモウレクを「父」と呼び、クフネロヴァーを「母」と呼んだが、彼らに続けざまに訪れた死は——モウレクは一九一一年一〇月二四日に、クフネロヴァーはその二か月後、一二月二一日に他界した——エリアーシヨヴァーに強烈な衝撃を与え、事実上、彼女が日本へ旅立つ直接の要因となった。外国の文化や思潮に触れることで自分の世界観を広げると同時に自己そのものを磨くという二人の恩師の教えを胸に、エリアーシヨヴァーは、もはや親の手助けを頼りにできない子鳥の巣立ちのように、羽を力強くはたかせて世界へと飛び立った、とでも言えよう。

しかしここで注目すべきは、最初の日本旅行にあたり、彼女にもうひとり、いや、ふたりの、決して忘れてはならない恩人がいたことである。モウレクとクフネロヴァーは、エリアーシヨヴァーを世界に送り出したと言っても差し支えないだろうが、世界で彼女を受け入れ、ひとり立ちできるまで世話をしてくれた人物がいたのである。東京帝国大学英文科の教師ジョン・ローレンスと、その妻である。ロー

長女が生まれて間もないころのローレンス夫妻の写真。エリアーショヴァーは、来日前にモウルコヴァー夫人からか、日本滞在中にローレンス夫人からもらったものである。 (ナールプステク博物館所蔵、EI. 6/1)

レンス夫妻の援助がなければ、エリアーショヴァーの最初の来日は——そしてその後の来日も——間違いなく実現されなかった。

周知のように、ジョン・ローレンスは、一九〇六年七月に帝大の教授職を辞任した夏目漱石の後を継ぐかたちで、同年九月に東京帝国大学英文科の教師に着任し、没する一九一六年まで約一〇年ほど東大生に英語と英文学を教えた。漱石とは違い、文学者／批評家ではなく歴史言語学者であり、英文学の講義でも、物語の解釈よりひたすら語彙や文法の解説を展開したというローレンスについては、「その学殖の深き事其人格の高き事其情義の厚き事は友人門弟の欣慕措く能はざる所でありました。(…)これまで日本に來た外国人の中で純然たる学者としてロレンス先生を凌ぎ得るものはなかつた、また今後も先生を凌ぎ得るやうな外人を招聘する事は六ヶしいであらう」というような、その博学や人間味、学者としての威厳を誉め讃える教え子たちの証言もあるが、無味乾燥な文法論に満足するはずがない文学青年たちが多くいるなか、ローレンスの人気は決して高くなかつた。それどころか、その人物や教授法は、漱石の『三四郎』をはじめ、複数の文学作品で戯画化されている。⁸⁾しかし、このような文学的〈証言〉が多く残されているのにひきかえ、ローレンス自身の出自、その学歴や職

歴などについては詳しく知られているとは決して言えない。

ローレンスの没後、一九一六年四月の『英語青年』に掲載された、教え子のひとりである英文学者市川三喜による「ロレンス先生の事業」その他の資料からは、彼の生涯の遍歴を次のように要約できる。

ローレンスは一八五〇年にイギリスのデヴォン州のサンフォード・ペヴァレルで、裕福とはほど遠い家庭に生まれたが、シッドコット市の小学校で才能を認められ、同学校で助教員をつとめるようになった。その後、ロンドン大学で学士の試験に合格し、ウェストン＝スパー＝メアで学校を開く。一八八五年にロンドン大学で古文学を専攻して修士号を取得したが、パリとベルリンの留学を経て一八八七年に、今度は近世語学を専攻して同じく修士の学位を手にした。その後、国会議員サムレル・スミスの宅で家庭教師をつとめる時期もあったが、注目すべきは、一八九一年から約三年間、彼がブラハのカレル大学で英語講師をつとめ、ここで頭韻詩に関する博士学位の請求論文 (*Chapters on Allitative Verse*) を執筆したことである。九三年に博士号を授与されたローレンスは、さらに勉学をつづけるため、オックスフォード大学に入学し、一九〇二年にここで再び修士号を得た。一九〇一年から一九〇六年

まではベッドフォード高等女学校で英語と英文学を教えたが、一九〇六年に日本文部科学省の招聘を受けて日本に渡った。ローレンスにとってこれが最初の大学の職であった。

豊かな才能と知識欲に恵まれた少年ではあったが、貧しい家庭に生まれ、若くして父と二人の兄を亡くしたローレンスは、母と二人の姉を養う義務を背負わされた。このような事情もあり、ローレンスの教育も、学者としての進路も決してまっすぐではなく、紆余曲折を経て五六歳という高齢でようやく大学での専任職を得た。結婚も遅く、一八九四年に四五歳で結婚し、一男二女を設けた。

ローレンスは、帝大の英文科の講師をつとめたラフカディオ・ハーンやアーサー・ロイドと同様、長年日本に滞在し、日本で骨を埋めることになった。しかし、日本の庶民文化や日本人の精神生活について十数冊の著書を遺したハーンや、仏教の研究のほかに日本文学の翻訳を手がけたロイドとも異なり、ローレンスはもっぱら教育に集中し、生涯を通して複数の学位を取得したにもかかわらず、研究論文がほとんどなく、その他の執筆も僅かである。「先生の日本語に対する興味及び日本語発音に関する精緻なる観察に驚いたことがあります⁹⁾が、日本語を話されたことは殆んど全くありませんでした。」という証言からも分かる

一九一三年六月二七日付の郵便はがき。東京で帰国の準備を進めるエリアーショヴァーに、ローレンス夫人が軽井沢の様子を伝えている。
(ナールプステク博物館所蔵、El. 1/16 131)

一九一三年六月二〇日付の郵便はがき。モウルコヴァー夫人からの手紙を転送したことを伝え、また帰途の費用についてのさまざまな情報とアドバイスが記されている。エリアーショヴァーが帰国の際に旅費不足で悩まされていたことがわかる。
(ナールプステク博物館所蔵、El. 1/16 132)

ように、日本語はできなかつた。彼に対する低評価は、あるいはこの二点、すなわち執筆意欲のなさと言語能力の低さにも起因していたかもしれない。

前述したように、日本旅行を決めたエリアーショヴァーに、モウルコヴァー夫人がローレンス家への紹介状を渡ししてくれた。モウルコヴァー夫人とローレンス家の接点については確かな証左がないが、モウレクは一八八七年にイギリスに留学し、ロンドン、オックスフォードとケンブリッジに滞在した。ローレンスは一八九〇年代初頭にプラハのカレル・フェルディナンド大学で英語講師をつとめたが、モウレクは早く一八八八年に同大学のドイツ言語学の特任教授に任命されている。なお二人とも言語学者であり、古代英語やゴート語に強い関心を持っていた。ここから、二人は遅くても一八九〇年代初頭、プラハで知り合ったと推察される。もしモウレクのイギリス留学時代に二人が知り合っていたとすれば、ローレンスはモウレクの紹介によってカレル・フェルディナンド大学に講師の職を得たとも考えられる。モウレクの妻がアイルランド人であったことも二人の交流を強めた一因ではなかったのか。

エリアーショヴァーは日本到着後、ことに最初の一ヶ月ほどローレンス一家の世話になったが、エリアーショヴァーの日記をもとに、この期間の彼女の動向を手短にま

とめよう。¹⁰⁾

八月九日

日本へ発つ。列車でプラハからワルシャワ、モスクワ、オムスク、ハルビンを通つてウラジオストクまで行く。ウラジオストクからシムビルスク号 (Simbirsk) で敦賀へわたり、敦賀から列車で東京に向かう。

八月二四日

東京着、セントラルホテルに一泊。

八月二五日

東京から軽井沢へ。ローレンス一家の別荘に泊まる。

九月三日

ローレンス一家と小諸、布引観音を訪れる。

九月一〇日

明治天皇大喪のため上京、ローレンス一家の赤坂氷川町の宅に泊まる。

一〇月九日

神田の今城館に移住。

一一月二日

淀橋の通信官吏練習所で英語講師の職を得る。

エリアーショヴァーは、一九一二年八月二四日の夕方に東京に到着したが、真夏のこの時期をローレンス一家が軽井沢の別荘（北軽井沢三三三番）で過ごしていたため、セントラル・ホテルに一泊し、翌日さっそく軽井沢に向かった。約三週間でおよそ一万キロの距離を旅したエリアー

シヨヴァーは、ここで旅の草鞋を脱ぎ、身を落ちつけることになった。⁽¹²⁾

汽車が碓氷峠に登ると、素晴らしい展望が目の前で開かれる。汽車がゆっくり、重々しく上へ上へ這い上るときは、目がくらむほど深く、色とりどりの溪谷を眺められる。途中で二十六のトンネルを通り抜けていくが、そのつど、眺めが変わり、新たに絶景が映し出される。

軽井沢ではモウルコヴァー夫人のイギリスの友人、ローレンス博士とその夫人が私を待ち受け、ご自身の竹材の別荘で親切に私を迎え入れた。私は暑い夏の残りをここで過ごした。

旅行中の日記をもとに書かれ、帰国後に出版された旅行記『日本人との一年』*Rok zivotia mezi Japonci* (Praha: Barbora Markéta Eliášová, 1915) からの一節である。ローレンス一家の人たちと行動をともし「毎日村に下りて買い物をしたり散歩をしたり」⁽¹³⁾しながら長閑な日々を過ごした。エリアーシヨヴァーはさつそくここで日常の動向や印象を書きまとめ、母国へ送りはじめた。一〇月から彼女の日本印象記が、『女性雑誌』をはじめ複数の新聞雑誌に発表され

るようになった。

村に下りて買い物をしたり、日本の商人たちが東京や横浜、大阪などから運んできて店に並べられている品物を見物したりした。商店の正面全体が開かれ、品物が綺麗に陳列され、美しい展示をなしている。日本の店員さんはとても礼儀正しく、穏健で、とても親切である。無理に押し付けるように品物を見せたり、やかましく誉めそやしたりするようなことはしない。優しい笑顔を浮かべながら客に店中を回らせ、説明を求めると落ちついた声で答えてくれる。

このイギリス人はスポーツ、とくにクリケットに夢中である。昨日は記念大会が開催され、多くの観客が集まった。選手と観客のために紅茶と軽食が用意された。このイギリス人のコロニーが一同に会したのをこの時初めて見た。こんなにたくさんいるとは驚いた。全員参加したわけではないが、それでも二百人も集まった。まだ、日本ではなく、イギリスのどこか、もしくはスコットランドの山に来ているような心持がする。⁽¹⁴⁾

二週間ほど軽井沢で過ごしたエリアーショヴァーはローレンス一家とともに九月一〇日に東京に戻った。当分はローレンス家の赤坂氷川町の宅に寄宿したが、一〇月九日、神田の今城館で部屋を借り、翌年帰国する七月までここに宿泊した。ローレンス家にこれ以上迷惑をかけたくないという配慮もあっただろうが、それより英語話者たちの環境を離れ、日本人の真の姿とその生活に触れたいという気持ちが強かっただろう。しかし今城館に移ってから、エリアーショヴァーは、ローレンス夫人との連絡を取り合い、互いの家を訪れたり一緒に出かけたりした。ローレンス夫人が、エリアーショヴァーにリード夫人を紹介してくれたことも、エリアーショヴァーにとって大きな意味を持った。彼女はリード夫人の推薦により通信官吏練習所で英語講師の職を得たからである。

エリアーショヴァーは帰国後もその恩恵を忘れなかった。第一世界大戦後に書かれた回想記「ミセス・Lの手紙を読み返して」(『チェコの世界 (Czechy svet)』一九一九年四月一七日)では、買い物物がてら赤坂や麴町を散歩したり、横浜まで一緒に行ったりと、記憶に残ったさまざまなエピソードを記し、「はじめはどこか疑い深く、よそよそしくもあったが、ほんとうは愛嬌のある親切な方である」「彼女の友情は、ただひとり極東にいる私にとって、どれほど

大切なものであったか」と、ローレンス夫人の姿を懐かしく思い返している。来日直後のエリアーショヴァーにとって、ローレンス夫人はかけがえのない理解者であり、支援者であり、よき友でもあった。

終わりに

エリアーショヴァーは生涯を通して、親しく交流するようになった人や、さまざまなかたちで支援をしてくれる人たちに出会っているが、モウレク教授とその妻、勤務先の高等商工業女学校のクフネロヴァー校長、初来日の際に世話をしてくれたローレンス夫妻の影響は、そのなかでとくに大きい。三人の指導と援助がなければ、エリアーショヴァーの最初の日本旅行が実現することはまずなかった。この最初の世界旅行と日本訪問がその後のエリアーショヴァーの人生の方向を決定づけるものとなったことを思うと、彼らとの出会いこそ、エリアーショヴァーが生涯歩みつづけた道を決めたのだといっても過言ではないだろう。この出会いがなければ、エリアーショヴァーが女性旅行家として歴史に名を刻むこともまたなかった。

注

- (1) スロバキア旅行について、エリアーショヴァーは「スロヴァキアへ」*Na Slovensko!* (『女性雑誌 (Ženské listy)』一九一〇年八月) と「スロヴァキア民族のお祭り」*Ze slovenských národných slavností* (『女性雑誌』一九一一年二月) を発表。他に一九〇九年にチェコのモラビア地方を同僚と旅行したと思われ、同年「ヒーリッツ村のマリアーナ・ヴェヴェルカ婆さん」*Starénka Mariana Taverka "Chvilie"* (『女性雑誌』一九〇九年十二月) という旅行隨筆を発表している。
- (2) 晩年に執筆されたと思われる未発表の自伝小説「運命に翻弄されて」*Na vlnách osudu* (ナールステク博物館所蔵) による。この作品の後半には著しい脚色がみられるが、エリアーショヴァーの生立ち、教員生活や最初の日本滞在を題材にした前半は、エリアーショヴァーの日記と照合してみると、題材を現実に近いかたちで小説化していることがわかる。
- (3) 一九一一年の日記 (ナールステク博物館所蔵、E1 3/4)。
- (4) 一四世紀中葉、南ボヘミアのチェスキー・クルムロフにあるコンベンツァル聖フランシスコ修道会の修道院で作られたと思われる。
- (5) 自伝小説「運命に翻弄されて」による。
- (6) *Jindřiška Flajšhansová. Ředitelka našich škol slečna Johanna Kuffnerová. Ženské listy*: 40 (1), 1912.1.
- (7) 市川三喜「ロレンス先生の事業」(『英語青年』一九一六年四月)。
- (8) 他に野上豊太郎の小説「みな」(『新文芸』一九一〇年三月) や、野上八重子の「助教教授Bの幸福」(『中央公論』一九一八年九月) など、ロレンスをモデルにした人物が登場している。ロレンスをモデルにしたこれらの作品については、橋川俊樹「小川三四郎が〈英文学者〉となる未来——ジョン・ロレンスの学統と「助教教授B」千葉勉の航跡に照らして」(『共立国際研究 共立女子大学国際学部紀要』二〇一三年三月) などある。
- (9) 八木又三「ロレンス先生」(『英語青年』一九一六年五月)。
- (10) モウレクはその後、一九〇一年と一九〇六年にもイギリスを訪問している。
- (11) 一九二二年の日記 (ナールステク博物館所蔵、E1 3/5) 軽井沢滞在中、また上京後のエリアーショヴァーは、ロレンス家で住み込みの家庭教師をつとめ、二人の娘の教育にあたったという指摘 (例えば、*Josef Paulík, Barbora Markéta Eliášová (1874-1957)*, Jihkvice: Obec Jihkvice, 2003) もあるが、エリアーショヴァー自身の日記を見る

かぎり、家事の手伝いや娘たちの子守りをしたくらいで、

これに対して報酬が支払われていたわけではない。

(13) 一九二二年の日記 (ナープルステク博物館所蔵、EJ. 3/5)

(14) Barbora Markéta Eliášová. Z cesty do Japonska (日本からの

便り). *Ženské listy*. 1912/12.

付記 本研究はJSPS科研費19K13142 (研究課題「チェ

コ女性作家B・M・エリアーショヴァーと日本旅行記・

ジャポニズム文学の研究」の助成を受けたものである。

(ブルナ・ルカーシュ・実践女子大学准教授)